

大阪の希少鳥類保護プロジェクト①

お  
**違うたか おおさかのオオタカに**

**守ろう オオタカ 里山の自然**



**(財) 日本野鳥の会 大阪支部**

# オオタカ

学名 *Accipiter gentilis fujiyamae* 漢字名 蒼鷹

## ● オオタカとはどんな鳥か

オオタカは、平地から丘陵地の林を繁殖地とする里山の生態系の頂点に立つ鷹の1種であり、オスは全長約50cm、メスは約57cm、翼を広げると1mに達する。

### 法などによる位置づけ

- ・絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律  
　　国内希少野生動物種に指定
- ・環境省レッドリスト  
　　VU：絶滅危惧Ⅱ類 指定
- ・大阪府における保護上重要な野生生物  
　　一大阪府レッドデータブック  
　　絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種に指定



▲オオタカ（成鳥オス）

## ● オオタカのからだ

**【翼】** 翼を広げると約1mになるが、飛んでいるときには、翼は短めで尾が長く見える。

**【目】** 視力は人間の8倍程度といわれており、遠くのものまではっきりと見ることができる。

**【くちばし】** 先端が鋭く曲がったくちばしで、獲物をうまく引きさく。

**【爪】** 大きく長めの足に4本の足指、鋭く尖った爪で、獲物を押さえ、仕留める。

**【声】** ふだんはほとんど鳴かないが、繁殖期には侵入者に対し「キッ、キッ、キッ」と大きな声で鳴く。ヒナは餌をねだるときに「クイー、クイー」と鳴く。

### 【成鳥と幼鳥のちがい】

成鳥は、頭から背が濃い灰色で、胸から腹は白く、細かい横帯が多数ある。白い眉斑<sup>ひはん</sup>と太くて黒い眼帯<sup>こうさい</sup>と黄色またはオレンジ色の目（虹彩）<sup>こうさい</sup>が特徴。幼鳥は頭から背が茶褐色<sup>ちゃやかつじょく</sup>で、胸から腹にかけては、はっきりした褐色の縦斑<sup>じゆうはん</sup>が見られる。巣立ちして間もない幼鳥は目（虹彩）が黄色ではなく灰色に見える。

## ● オオタカのくらし

### 【生息環境—どんなところにいるの】

平地から丘陵地、低山にかけて、森や林と田畠が残る里山に一年中くらしている。冬には、北の地方から渡ってくるものもいて、農耕地やため池、都市公園などでも姿を見ることができる。

### 【営巣環境—巣づくりの場所は】

まとまった大きさの雑木林などで、ため池の近くや沢ぞいに生えるマツやスギなどの大木に巣をかけることが多い。

### 【食べ物と狩り】

ハトやムクドリ大の小鳥が主な獲物。キジやカモなどの大きな鳥やノウサギやリスなどの哺乳類を捕らえることもある。

オオタカは、安全な木の枝に止まって、木の上から獲物を待ち伏せたり、空をゆっくり飛びながら獲物をさがす。獲物を見つけると幅の広い翼と長い尾をうまく使って、林の中を自在に飛び、獲物をしつこく追いかけ、足を突き出して獲物に爪を立てる。

## ●オオタカの生活サイクル



※ 網掛けの時期はオオタカの敏感度が極大で、不用意に巣に近づくと繁殖を放棄することがあり注意が必要

### 【繁殖行動】

#### ・求愛 1月～ ディスプレイ飛翔

オスが波状に飛んだり、旋回飛翔したりする。

#### ・巣づくり 2月～

主にオスが巣づくりをする。アカマツやスギなどの針葉樹の大木の高さ8～20mの幹近くの枝に枯れ枝を組み合わせて円形の大きな巣をつくる。コナラなどの落葉広葉樹も利用される。数年続けて同じ巣を使う場合や、古巣を利用する場合、新しくつくる場合などさまざま。

#### ・産卵 4月頃

ニワトリの卵より一回り小さいぐらいの白い卵を3～4個産む。

#### ・抱卵 4～5月

主にメスが行う。約40日で孵化。

#### ・子育て

孵化後間もないヒナはヒヨコぐらいの大きさで純白の羽毛に覆われている。孵化後15日を過ぎるとハト大になり、頭部や翼の先端、尾から黒褐色の羽毛が生え始める。孵化後30日を過ぎると親鳥とほぼ同じ大きさになり、全身褐色の羽毛に覆われる。ヒナが小さい間は、オスが獲物を巣へ運び、ヒナへの給餌はメスが行う。ヒナが大きくなるとメスも巣を離れ、狩りに参加する。

#### ・巣立ち6月中旬～7月上旬

孵化後35～40日で巣立ちする。ヒナは4羽が巣立つことは稀で、1～3羽(平均2羽)のことが多い。巣立った幼鳥は、しばらく巣の近くで親鳥から餌をもらい、早いものは8月中に独立、分散する。



▲ 巣立ち直後のオオタカの幼鳥

### 里山を代表するもう一つの鷹 —サシバの現状—

サシバは夏鳥として東南アジアから渡ってくる中型のタカで、かつては、府内各地の里山で普通に見られたが、近年、個体数の減少が著しい。

主に鳥を捕らえて食べるオオタカとは異なり、サシバは、だにあい 谷合の水田（谷津田）や水辺でカエルやヘビ、昆虫などを捕らえ、餌としている。水田の放置による草地化、宅地開発などによる里山の環境の改変、産廃や残土による谷や湿地の埋め立て、圃場整備や水路のコンクリート化などにより、餌となるカエルやヘビが著しく減少するなど、サシバが子育てできる里山の自然が急速に失われつつある。

サシバを守るためにには、多くの生き物が息づく里山の環境を取り戻していくことが必要である。



## ●大阪府内におけるオオタカの生息状況

2000、2001年に本会が実施した生息調査によると、大阪府内で48つがいの生息地が確認できた。

地域別の内訳は次表のとおりである（中河内地域、北河内地域、大阪市域では生息地は確認できなかった）。生息地は標高100mから300mまでの丘陵地から低山に多く、500mを超える山地では少なかった。

地域名	市域毎の営巣地数
豊能	能勢町3、豊能町1、箕面市2
三島	高槻市4、茨木市3
南河内	羽曳野市2、河南町2、富田林市4、河内長野市4
泉北	堺市3、和泉市5
泉南	岸和田市5、貝塚市4、泉佐野市2、泉南市3、阪南市1

上記以外に、営巣地が特定できていないものが複数箇所あり、また今回の調査以前に繁殖が確認されている地域もあることから、府内でのオオタカのつがい数は50を超えると考えられる。

## ●オオタカの保護

オオタカなどの猛禽類の多くが、開発による生息環境の改変や、残留性の高い有害物質による環境汚染の影響（体内への有害物質の蓄積による繁殖障害）で、絶滅の危機に直面している。

人里近くにくらすオオタカを保護していくためには、里山の自然を守りながら、人間との共存策を講じていくことが重要である。

ここ数年、府内でもオオタカの生息に影響を及ぼすと考えられる大規模な宅地開発やダム建設、農道整備などの公共事業が進められており、本会も複数の「オオタカ調査委員会」に専門委員として加わるなどし、具体的な保護策を提言してきた。一方、比較的小規模な民間の開発等で、生息調査等が全く行われないままに、事業が進められ、オオタカの貴重な営巣地が失われてしまった例もある。

今後は、行政機関が営巣地の情報をきちんと把握し、個々の生息地に応じた保護対策を講じていく必要があると考える。

### [問い合わせ]

(財)日本野鳥の会 大阪支部

TEL06-6766-0055(火・金・日 AM10~PM6)

FAX06-6766-0056

URL : <http://www.10.plala.or.jp/birdosaka/>

〒543-0011 大阪市天王寺区清水谷6-16NEXT21 1F

2005年8月



### 一オオタカの保護指針

オオタカの保護については、環境庁（現環境省）から「猛禽類保護の進め方」というマニュアルが出されており、オオタカの生息地周辺で開発行為を行う場合には、巣のある場所を中心とした「営巣中心域」、繁殖期に餌を探ったり、飛行するルートなどの「高利用域」を調査により特定し、保護対策を検討することとされている。また調査期間は、少なくとも繁殖が成功した1シーズンを含む、2回の営巣期の調査が望ましいとされている。

### 大阪の希少鳥類保護プロジェクト①

守ろう オオタカ 里山の自然

編集：日本野鳥の会大阪支部 保護部  
(参考文献)

- 「自然保護No.408」日本自然保護協会 1996
- 「巣と卵図鑑」小海途銀次郎他 1999
- 「図鑑日本のワシタカ類」森岡照明他 1995
- 「猛禽類保護の進め方」環境庁 1996